

天  
気  
晴  
朗

天気晴朗 編集作業トラブルあれど

今のこの時に謝す 誌の編集開始

窓開け放てば 新緑匂う書齋なり

もみじ葉裏より見上げ 書齋に憩う

はらはらともみじ葉翻る 書齋清し

赤いビロードのごと 新芽伸び立つ

新芽の重なり 薫風を呼び合い

新芽より きらめく光の滴落つ

制服のぼりゆく 新芽の坂を

女学生の笑顔弾ける 芝新し

時間勤務者となり 川べりをゆく

七羽の鴨 今朝も群れいる

影法師 一足毎に先にあり

十五の春に戻り 一人泣いてみたし

はるかな思いきざし 目を閉ず

子の転職なる ビルの三十数階に

ビルの中庭 モニュメントに風

ビルの中庭に 心地よい風抜ける

春霞の皇居 堀に菜の花涼し

堀の水眠る 半蔵門に立つ

花散り敷く道 雨蕭然と穿ちゆく

就職進学 落花急きゆく春の朝

雑草の如くあれ 職なき子らよ

草の息吹熱く 地の内に燃ゆ

何か之急かされ 電車に乗りしが

スンスンと 芽吹く気配す山の午後

里に犬鳴く 春山にいる

光る水流れくる 神域から

神域の水 音なく流れ谷に入る

風に吹かれ 山から一人下りくる

昇る月を しげしげと見上げる

ふいと浮かんだ月に 手を伸ばす

風船のように揺れ 月昇りゆく

満月を背負い 交差点歩みくる

満月高く 空冷え冷えと澄む

たかが文芸誌のこと　それだけのこと

理屈もへチマもなし　創出あるのみ

引き返す術なし　火の道に入れば

一日ゆく　光駆ける速さにて

黄昏れて雨戸引く音　冬日過ぎゆく

酩酊という城に籠もりし　我が春は

孤立無援を気取り　一人呑む居酒屋の隅

酔うのみの　春いたずらに急ぎしは何

酔いのあとの目覚めの空しさよ　ただ宙を搔き

大言壮語　その馬鹿さ加減に酔う

吹かれている子ら　春爛漫の顔をもち

子を持つは　二重三重に思い馳す

乾いた咳　母には肺炎かと映る

長電話の果て　塞がる思いなお止まず

水平線 三筋四筋の水脈を引き

繋がりとというテーマで 教授最終講義

物から宇宙空間まで どう繋がりにゆくか

繋がりに果てなし 我が宇宙観なれど

誌の発起書出し終えた途端 風邪襲いくる

眠られぬ床で 螺旋階段を上下する

インフルエンザ流行 両隣にマスクあり

これからは真剣ぞ と己に斬り込む

ライフワークと定め 文の鬼と化する

この冬寒し 青い鳥来て枝に吹かるる

メジロ瞬時に去り 音なくまた来たる

筑紫野の雪に 一条の光射す

生垣曲がれるままに 雪降り積む

侘助の花弁 ひとひらほどの雪抱き

車の轍跡 次々と雪が消しゆく

事故の現場検証 黄昏の雪の中

障子張り 部屋の空気を一新す

一月晴天 一ミリずつ暮れ落ちる

川べりを歩き電車待ち 一日始まる

規則正しい一日 ありがたきなり

歩みつつ祈る 風に日に

新春来たる 梵鐘の余韻の中

雪直ぐに降る 風も音もなき元旦

泥濘をゆく 産土神社の鳥居下

産土神社に 鎮もる鋭気凜と立つ

柏手打ち 老農ら皆頭垂れ

全てを預かってもらい 神域を出る

野に光射す 白くきよらの矢となりて

機影きらめきのぼる 新春の空

菊の香新し 新春の軒端下

鐘の音さらさら流れ 元旦暮るる

クリスマス発表会 カルチャアの華

緊張の極みに 花が華になる

よい年をの挨拶 真に響く歳となり

寒空を雨がよぎる 今年は変

変の年極まり 右往左往している

紅葉篩い落とし 雨斜交いに降る

川ゴウゴウと鳴り 雨移りゆく

神域の写真 ネガの如く揺れ

神域の水清し 湧くを掬えば

社の橋を渡り 娑婆に戻り来る

東空の虹 僥倖を呼ぶという

紅葉の八幡大社 光の粒舞う

紅葉散る 頭に肩に背に足に

社殿の朱 秋空の大海に浮かぶ

苔幾重にも積む 祓所とあり

柿葉ハラリ落ちくる 草筆る手に

赤信号 運転士背筋立て待つ

ワイパー激しくまわし 嵐をよぎる

黄葉舞うキャンパス 人影なし

懐手する 北病棟への廊下

布団を貫く 底冷えとなる

北風激し 鴨首すくめ動かず

雪降りくる気配 足早に橋を渡る

風邪の震えが 身内にきざす

オリオン高く しんしんと冷ゆ



川面陽光に透き 鴨二つ三つ

足音軽く 川べりをいくランドセル

一点の櫛の朱 切岸に咲く

熟柿日を透き 空青きまま

古刹への砂利道 鐘一つ鳴る

満天の星 オリオンここにあり

アンドロメダ座星雲指し 仰ぐ天頂

月青く輝る 空高く澄めば

月明かりの中 影二つゆるゆるとゆく

水音高くなる 岩めぐるとき

くるりと背中見せ 柳の下で分かれる

果てしない不安 足裏に踏みしめ

月を見ている 灯がひとつ消えゆく

鈍色の空 鳥列なし渡りゆく

コンドルのうた 秋空に高く鳴る

海風吹きさらす通りを抜け 病棟に入る

八度の熱続くと 母小さく笑う

弁には異常なしと 女医丁寧に説明す

手術中 誰も彼も無口で足組み替える

病室の窓から コスモスの群生見ゆ

ペースメーカー手術完了と 若き女医

手術を終えし女医の長い指 手袋を脱ぐ

女医颯爽と説明終え 風の如く去る

心通う医療という 理念に裏打ちされ

患者母 見舞い人に気遣う経過よしと

元寇の島 蟹涼し気に潮を吐く

海うねるごと 火矢攻め来たるかと

松籟聞けば 思い馳す癖となり

抱擁の場ともなり 古戦場跡ゆえ

古戦場に秋日射し 男女動かず

蟻が空を担ぎ 出てきた出てきた

鷺鋭く鳴き 空駆けのぼりゆく

空曇り 鳩いつせいに低くとぶ

女流作家の作秀逸と思う 秋の夜

平明なことばが 諄々と説く

秋日和 露地に棟打つ音高く

赤子抱き 施主晴れやかに立つ

秋空に棟上がるを 乳飲み子と見る

日溜まりの庭 木賊水直に立つ

大根の葉の茂り 大空を掃く

十五夜の月 茹卵のごとく生まれ出で

月出ずるとき 橋の欄干に人並ぶ

炯々と 十五夜の天澄み渡る

月のぼり 川辺の虫のシンフォニー

道一本明々と伸ぶ 月下なり

松籟微かに 島の秋暮れゆく

松低く 入江淵のごとく蒼し

断崖の石に咲いた 赤い花

暁の潮 激しい意志を持つごとく

時空を今 星さらさらと流れゆく

天上天下 コスモスの歌

秋風に 一輪のコスモスを流す

彼岸花群れ 虫キチキチと鳴く

白い花 彼岸花のうちに二三本

秋日ゆるりと溜め コーヒータイム

埋められぬ余白のような 秋の夜

九月ゆく　しののめに雨音走らせ

雨の音　心地よく聞くはなぜ

長い手紙書く　会わぬ人に

猫合図して通る　窓の下

蜘蛛の糸　雨粒絡め撓むほど

蜘蛛の糸　はたはたはたと音をたて

古今の著読みたし　今切実に

父の墓に参る　性悪の吾なれど

秋の蝶　はすかいに飛ぶ垣の上

採血針　秋朝の刻研ぎ澄ます

血液踊り出る　じつと見詰める

採血長し　ふと目眩きざす

行くほかない道　青ざめつつ行く

検査終え　交差点に走り入る

大根間引きす 健康な根を引き剥がし

柿青いまま落つ 今朝の雨に

出会いというのは ミラクルかとも

猫も競うか 恋の行方を

自費出版 贈る勝手という罪あり

青空のもと 氷河際限なく解けゆく

天地荒れ 自爆テロ止むことなし

強きもの勝つは 人の世の常か

人が人を笑う あざとい理屈並べ

夜半に浮かぶこと およそ悲しき

ひよいと自転車に乗り 行先告げず

栗のいが 針となり草叢に潜む

落ち葉の下 栗金色に輝く

台風近し 猫露地に忍び入る